

## ヘンリー・ジェームズのアメリカ観 (3)

藤野早苗

「ボストンの人々」(*The Bostonians*) に続いて長編「プリンセス・カサマシマ」(*The Princess Casamassima*) を書き終えたジェームズは1886年12月にイタリアへの旅に出る。快適な気候風土、どこを見ても過去を認識できる環境の中でジェームズは日常性を脱した解放感を味わい、滞在を楽しんだ様子が兄ウィリアム宛の手紙<sup>1</sup>にもうかがえるし、何よりもはじめ一ヵ月の予定の滞在が六ヵ月あまりにも延びたことがその証明と言えよう。この間ジェームズは雑誌の連載から開放され、自由に精力的に創作活動に従事した。「ザ・リバーバレイター」(*The Reverberator*)<sup>2</sup> , 「アスパンの手紙」(*The Aspern Papers*)<sup>3</sup> , 「ロンドン生活」(*A London Life*)<sup>4</sup> などの多くの短編を残している。これらの作品はいずれもヨーロッパを舞台としてアメリカ人を登場させているが、1881-1883年にかけてのアメリカ訪問の際ジェームズの心に重くのしかかったプライバシーとパブリシティの問題が依然として彼の大きな関心事であったことが作品から読みとれる。アメリカともイギリスとも異なる社会に身をおいて、ジェームズはこの問題についてどのように考えたのであろうか。本稿では上記の三作品の分析を通してジェームズのプライバシーについての考え方を考察するとともに、あきらかに変化してきた彼のアメリカ人についての見方をたどってみたい。“Italian Hours” とよばれるこの六ヵ月のイタ

---

恵泉女学園大学 人文学部紀要 第11号 pp. 37～pp. 56, 1999

「ヘンリー・ジェームズのアメリカ観 (3)」

藤野早苗

リア滞在の期間はジェームズが自分のアイデンティティを見つめなおす時間でもあったのである。

## I

ジェームズは「ボストンの人々」において、消費文明の進展は広告を必要な手段として伴い、それと共にパブリシティの風潮が急速に社会に広まっていくことに嫌悪感を示していた。プライバシーの観念が希薄で傍若無人のジャーナリストのパードンを一貫して批判的に描き、彼が時代を代表する人物のように考えられている時代を危惧していたのである。「ザ・リバーバレイター」はそういうジェームズの時代認識が再確認された作品である。この作品の基となった逸話と、小説を書くに至った経緯が1887年11月17日の *Notebook* に記されているが、その中でジェームズはパブリシティが時代の風潮であること、それを取り上げずして作家は時代を描けないことを次のように言明している。

One sketches one's age but imperfectly if one doesn't touch on that particular matter: the invasion, the impudence and shamelessness, of the newspaper and the interviewer, the devouring *publicity* of life, the extinction of all sense between public and private. It is the highest expression of the note of 'familiarity,' the sinking of *manners*, in so many ways, which the democratization of the world brings with it.<sup>5</sup>

この作品においてジェームズは他人のプライバシーを平気で書きたてる新聞およびジャーナリストを批判していることは確かであるが、それ以上にそういう新聞やジャーナリストを容認するばかりか信奉している一般の人々の感覚、モラルの低下こそ恐るべき現象であることを強調している。物語の基となった逸話とは1886年の冬、ジェームズがイタリア滞在中に実際に耳にした話であった。ヴェニスに滞在中のマックレランというアメリカ人の娘が自分に親切に対応してくれているヴェニスの社交界の人々についてのゴシップをニューヨークの *World* という新聞に投稿し、それが新聞に掲載された結果、ヴ

ヴェニス<sup>6</sup>の社交界に大波瀾を巻き起こしたというものである。ジェイムズはそれが一人の少女がまったく悪意なく、平気でした行為であること、またその行為が巻き起こした結果に自らを反省するのではなく、むしろ当惑し、その後自分がヴェニス<sup>6</sup>の社交界から排斥されるのではないかと心配している様子に、驚きと憤りを覚えたのであった。この手紙は実際に1886年11月14日の *World* に掲載されていることがレオン・エデルの *The Middle Years* に記されている。<sup>6</sup> ジェイムズはこの出来事を “a very illustrative piece of contemporary life”<sup>7</sup> と受け止めたのであった。ジャーナリズムが書きたてる情報を共有することに人々が満足している状況の中で、人々の感覚は麻痺し、判断力を失ってしまっているのである。

物語の設定は中年にしてすでに莫大な財産を築き上げたアメリカ人ドソンが娘デリアとフランシーと共にパリを訪れている最中のことである。この一家がパリに渡る船に同乗したフラックというジャーナリストは渡航中からフランシーに恋心をつのらせたが、一度アメリカに帰っている間に彼女は肖像画を描いてもらった画家のアトリエで出会ったガストンと恋仲になり、婚約してしまう。戻ってきたフラックはフランシーを失ってしまった今、せめて新聞に載せられるような、婚約者の家族についての興味本位の情報をフランシーから聞き出そうとして、彼女を誘い出した。フランシーが不注意に喋ったことが脚色され、新聞に掲載され、その結果、婚約者の家族の間で大騒ぎになったというものである。このプロットを説得力あるものにするためにジェイムズはアメリカ人の新聞およびジャーナリズムに対する信頼の大きさをドソン家の人々のフラックに対する態度を通して示している。「ボストンの人々」においても、ヴェリーナの父親は新聞が大好きな人として描かれていたが、ドソンも新聞を信奉し、従ってその新聞を代表するフラックは “represented—well, all other representations” (22) と思っている。ゆえに自分の娘たちがフラックに親切にしてもらうことを光栄に思っている。娘たちもフラックを非常に頭の良い人として、この若い記者との交流を喜んでいる。このように信頼を受けているフラックだが、ジェイムズの指摘は次のように皮肉である。“Mr. Flack’s appearance was not so much a

property of his own as a prejudice or a fixed liability of those who looked at him....”と言い、さらに彼は“a specific person”ではなく、“the quality of the sample or advertisement”が目につくと表現して、彼が“a young commercial American” (14)であることを強調している。フラックが通信員をしている新聞「ザ・リバーバレイター」は発行部数20万部の大新聞であるが、彼はこれをさらに大きくする野望を持っている。この新聞は興味本位のゴシップ記事を載せるもので、政治、経済、社会に関する報道という新聞の本来の使命から逸脱したものであるが、それがアメリカ市民が望んでいるものであることをジェイムズは次に引用するフラックの言葉を通して明らかにしている。

The society-news of every quarter of the globe, furnished by the prominent members themselves—oh they can be fixed, you'll see!—from day to day and from hour to hour and served up hot at every breakfast-table in the United States: that's what the American people want and that's what the American people are going to have. (62)

プライバシーの領域を無視したジャーナリズムの横暴ぶりを市民が拒否するどころか、むしろ後押しする風潮であることが、たとえばフラックとフランシーの何気ない会話にも表れている。フラックはフランシーの肖像画を見に画家ウォーターロウのアトリエを一緒に訪れたいと言うが、それは画そのものに関心があるのではなく、肖像画を描かせたフランシーのことを新聞に書きたいからである。彼には画を画として鑑賞するゆとりも意志もない。一方、彼女も新聞に載ることに大満足で、“You may say what you like,...It will be immense fun to be in the newspapers.”と言い、アトリエで婚約者の姉に遭遇すると早速“He was going to publish an article—as big, as enormous, as all the rest of the business—about her portrait.” (133)と自慢気に言う。これでは“great hungry public” (184)が背後にあることに自信を持ち、ジャーナリズムはますます横暴になる。こ

のようにアメリカ人一人一人のプライバシーの観念が希薄になっていることにジェームズは危機感を覚えるのである。

フランシーが喋ったことをもとにフラックが書き、さらに別の人間が脚色して掲載されたゴシップ記事が、アメリカ人ではあるが、伝統を重んじるヨーロッパ社会に浸ることに専念してきたプロバーツ家の人々に大変な煩悶をもたらしたことを知ってのドソン父娘の反応に、プライバシーの観念の欠如がはっきりと見られる。その記事を実際に見るまではフラックに対して憤慨していたドソンだが、読んでみるとむしろがっかりした。とりたてて騒ぐほどのことはないと思ったからである。姉のデリアは何を撤回すべきなのか理解できなかった。当のフランシーは新聞のゴシップ記事の数々が人々の生活に危害を及ぼす可能性があったのだろうかとはじめて考えるが、父や姉がきわめて軽く受け流していることから、それ以上深くは考えないことにする。結局この一家にとって新聞は朝の太陽、夕の星と同じように必然的なものである。この一家の対応の仕方はまさに多くのアメリカ人のジャーナリズムに対する感覚のあらわれであり、ジェームズがイタリアで遭遇したマックレランの一件も同様であった。彼が実際にマックレラン家を訪れて母親と話した模様がブロンソン夫人宛の手紙に書かれている。ジェームズはこの一件は娘が若気のいたりで軽率にした行為であることは間違いないが、母親も責任を免れ得るものではないことを指摘した上で、次のように厳しい言葉で、甘やかされて育った、思い上がった軽率なアメリカ娘を批判している。“But good heavens, what a superfluous product is the smart, forward, overencouraged, thinking-she-can-write-and-that-her-writing-has-any-business-to-exist American girl! *Basta!*”<sup>8</sup> ジェームズは彼女らがヴェニス<sup>9</sup>の社交界から批判を受け、自分たちの行動の非を思い知らされるのはよいことだが、ゴシップで傷つけられた本人が気の毒だとも言っている。たとえ悪意はなくても、プライバシーの観念を欠いた行為は他人を傷つける結果となることを厳しく批判しているのである。ここにジェームズの若いアメリカ娘に対する見方に初期の作品とは大きな違いがあることに気付かされる。かつて *Daisy Miller* のデイジーには純粹無垢であるがゆえのヨーロッパの

マナーに違反する行動に周囲の批判はあっても、彼女の伸びやかさに新しい国アメリカを重ね合わせて好意的に見ていたジェームズだが、この作品に至ってはフランシーの行為は天真爛漫ではすまされないこと、ジャーナリズムの扇ぎ立てるパブリシティの風潮にのって軽薄にプライバシーを暴露する彼女に、“the scribbling, publishing, indiscreet, newspaperized American girl”<sup>9</sup>として苛立ちを隠せない形容をしている。

アメリカ社会におけるパブリシティの風潮に我慢ならないジェームズだが、パブリシティの風潮はもはやアメリカだけではないことも認識していたことが、この物語の場所の設定について苦慮した記述からわかる。*Notebook*の先に言及した箇所“that difficulty was where to find people today in Europe who would really be so shocked as that comes to—shocked enough for my dramatic opposition.”とあり、次いでイギリスはすでに*The World and Truth*のようなゴシップ紙が何でも書き立てている“a newspaperized world”であって、フランシーの行為にショックを受けるとは考えられないと言い、ヴェニスなら実際にマックレランの一件が起こったのだからあり得るのだが、あまりにも事実在即してしまい、小説には使えないとしている。さらに次のような興味ある記述がある。“The poor Venetians, living outside of modern enterprise, were shocked by Miss McC. ;but they are too near, and I can’t use them. Besides, their feelings are not interesting enough—the race is poor and represents today too little.”<sup>10</sup>またローマやフローレンスも程度の差はあるにせよ同様であるとしている。そして結局ジェームズの行きついたところはパリに住む“the Europeanized American”とすることであった。確かにドソン家のようなパリに長く住み、フランス社会に同化することに必死になってきた人たちなら必然的に視野は狭くなるし、スキャンダルを何よりも恐れるであろうから、ジェームズのこの選択は説得力があり、この場合もっとも適切であると言える。それ以上に重要なことはこの結論にいたるジェームズの記述には彼が現実の社会の状況をよく見極めていたことが窺えることである。つまり、パブリシティはもはやアメリカだけの状況ではなく、イギ

リスでも日常的になっていること、それが希薄なのは依然として古い時代そのままのイタリア社会であり、だからこそジェイムズはイタリアでの六ヵ月を楽しむことができたのであろうことが推測できる。だがジェイムズはイギリスに戻っていく。その意味を「ザ・リバーバレイター」の結末と関係づけて考えてみたい。フランシーの婚約者ガストンはドソン家と対照的に保守的な家族の一員である。個人よりも家族を大切に、フランシーとの結婚は家族が喜んで受け入れてくれてこそ幸せになれると信じている。従って姉たちがフランシーにやさしくしてくれるのを喜んでいた矢先の事件に大きなショックを受け、旅先のアメリカから急ぎ帰ってくる。家族の心情を思いやり、優柔不断な態度のガストンにフランシーは訣別を宣言する。悩むガストンに友人のウォーターロウは問題はフランシーにあるのではなく、個人としての自覚のないガストン自身にあることを指摘する。結局ガストンは家族を捨てフランシーと結婚する決心をする。つまりゴシップ記事の一件を乗り越えて一人の人間として独立して生きていく決心ができたわけである。たとえ新聞の無い場所を見つけることが難しくても、家族の顔色をうかがいながら固苦しく生活している狭い世界から離れて生きていこうとしているガストンには成長が見られる。パブリシティの問題に触れずしてこの時代を描くことは難しいという *Notebook* の記述からすると予想外に軽妙な結末であるが、これはジェイムズ自身の現実認識によるものであろう。いくらパブリシティの氾濫に嫌悪感をもって、それが現実である以上、それを乗り越えて生きていかなければならない。イタリアで自由を満喫したジェイムズであっても、そこに浸っていることをよしとせず、イギリスに戻って行ったのである。

## II

「ザ・リバーバレイター」では日常生活における意識のレベルでのパブリシティの問題を取り上げているジェイムズだが、「アspanの手紙」では文学作品と作家のプライバシーの問題に焦点をあてている。一人の作家という個人が書いたものが活字という媒体を通した時、それはパブリックなものになるわけだが、どこまで作家のプライバシーを守れるか、とくに作家の伝記的

あるいはジャーナリスティックな資料が出回るようになってきた時、作家のプライバシーは作品と並んで公衆の目にさらされるものになったことをジェイムズは意識していたものと思われる。これより先の1875年にジェイムズにはウィリアム・エラリー・チャニングの書簡集について論評を書いているが、これは手紙の内容についての批評そのものよりも、作家の死後に出版される手紙についての彼の考えを知る上で興味深い。この書簡集はボストンに住むチャニングとイギリスに住むミス・エイキンとの間に交わされたもので、チャニングの死の直前まで16年間続いたものであった。内容はほとんど個人的なこととは見られず、ミス・エイキンは大変知的レベルの高い女性だったらしく、政治的、社会的なさまざまな出来事や国の将来についての展望などをトピックスとして互いの意見を交している。内容はおよそゴシップになるようなことではないのだが、ジェイムズが問題にしているのはチャニングはそれらの書簡を処分することを望んでいたにもかかわらず、後の世代の者が読む権利があるのだろうかということである。ミス・エイキンが彼の意向を実行に移すことをためらっていたため、“the pestilent modern fashion of publicity”の手にかかってしまったわけだが、どこまでプライバシーを守るべきかはその個人が決める権利があるとジェイムズは考え、後世の者はいかに彼のプライバシーを知りたい欲求があっても、神聖な気持ちをもって抑えるべきであると考えていることが次の引用からわかる。

A man has certainly a right to determine, in so far as he can, what the world shall know of him and what it shall not; the world's natural curiosity to the contrary notwithstanding. A while ago we should have been tolerably lenient to non-compliance on the world's part; have been tempted to say that privacy was respectable, but that the future was for knowledge, precious knowledge, at any cost. But now that knowledge (of an unsavory kind, especially) is pouring in upon us like a torrent, we maintain that, beyond question, the more precious law is that there should be a certain sanctity in all appeals to the generosity and forbearance of posterity, and that a man's table-drawers and pockets should not be turned inside out.<sup>11</sup>



作家のプライバシーについてのこの考え方はイタリア滞在中に書かれた「アスパンの手紙」の軸となっている。

1887年1月12日の *Notebook* にリー・ハミルトンから聞いた話として、ボストンの美術評論家であり、詩人シェリーの崇拜者であるシルスビーが、かつてバイロンの愛人であったジェーン・クレアモントという女性が高齢ながら生存していることを知って、彼女が所蔵しているシェリーとバイロンの手紙を何とか手に入れたいと願い、その女性の家に下宿人として住みこんだという話の記述がある。“the general situation is in itself a subject and a picture”<sup>12</sup>と書いているが、ジェイムズはこの話のどこに主題を見てとり、物語を書いたのであろうか。1908年の *New York Edition* の *Preface* には物語の基になったものとして上述の逸話に言及し、“I delight in a palpable imaginable visitable past”<sup>13</sup>と書いている。そして過去をどの時点でなじみのないものと感じるか、なじみのあるものと感じるかが重要な点であり、両方の感じのバランスのとれている時点をとらえることにより、物語に緊張感を与えることができると考えたことが述べられている。そういう意味で歴史のはるか彼方に葬られた過去よりも、まだ想像が可能で、訪れようとすれば訪れることもできそうなバイロンの時代はまさに物語のために恰好な過去であり、そういう過去と現在をつなぐ可能性のある存在としてクレアモントがいたわけである。ジェイムズの興味を誘ったのはクレアモントが生きていたという事実であり、もう少し早く知っていたなら会えたかもしれないと思う一方で、自分が会いたいと思ったかどうかは別の問題であると言っている。このことは想像力を大切にするジェイムズの小説作法から言って当然であろうが、しかし注目すべきは「アスパンの手紙」の主人公はジェイムズとは対照的に、何が何でもその女性に会って、詩人の若い日の手紙を手に入れたい、それによって詩人の生身の姿に光をあてたいという願望に燃え、その目的に向かって突き進んでいく人物としていることである。この人物像の設定と物語の進行との関係に主題を解く鍵があるのではないだろうか。そういう観点から作品の分析をしていきたい。

物語はアメリカ人の文芸批評家らしい人物<sup>14</sup>を語り手としている。したがっ

て「語り」には彼の考えや心情がそのまま映し出される筈であるが、そうしてみると、彼には矛盾する二面があることがわかる。つまり彼は詩人アスパーンの崇拜者であることを強調し、アスパーンは“god”であり、“a part of the light by which we walk”であると言っている。しかし、一方で、そのアスパーンの若い日の恋人ジュリアナがまだ生存していることを知って、彼女が所蔵している筈のアスパーンの手紙を何とかして彼女から強奪したい願望を持っている。彼はその手紙のことを“my possible spoil”（5）と表現しているのである。「神」と崇める人の手紙を「強奪」したいという願望—この矛盾する自分の態度について彼は詩人の肉声を知ることによりその詩がより正しく理解できることになるはずであるから、手紙の強奪は自分個人のためではなく、アスパーンのためであり、世の人のためになる行為であると正当化している。そして、そのためには手段を選ばないことを公言して憚らない。彼はこの“the age of newspapers and telegrams and photographs and interviews”（8）にジュリアナが人知れずひっそりと暮らしてこられた事実は驚異だと言っているが、彼が今しようとしている行為はプライバシーの侵害をものともしない破廉恥なジャーナリズムの行為と何ら変わりがない。アスパーンの正しい理解のためと正当化しているが、見せたくない手紙<sup>15</sup>を強奪しようとすることは明らかにプライバシーの侵害である。上述のチャニングの書簡集の論評と重ねあわせてみると、この主人公の考え方はジェイムズのそれとは相反することがあきらかだ。

さて「目的」のために語り手がとった手段はジュリアナとその姪ティナが住む古い広大な屋敷に下宿人として住み着くことであった。家賃は法外に高かったが、それでもそうすることで手紙を手に入れることができるならと思ひ、応じる。お金で解決がつかぬらというアメリカ人らしい態度が明白である。彼女らの屋敷に住み込んだものの、ジュリアナとティナは自分たちの住む部屋の窓を固く閉ざして、なかなか接する機会がない。しかし彼女らのそういう態度は逆に「隠す必要のあるもの」を持っていることを語り手に確信させ、一層それをあばきたい欲求にかられ、執念になっていく。アスパーンがジュリアナに宛てた手紙はあくまで二人のプライベートな世界であ

る筈なのに、彼にはそれは研究のために必要な「もの」なのである。彼を含めての批評家やジャーナリズムに対するジェイムズの厳しい批判が次に引用するジュリアナと彼との会話に示されている。

“Oh I like the past, but I don't like critics,” my hostess declared with the hard complacency.

“Neither do I, but I like their discoveries.”

“Aren't they mostly lies?”

“The lies are what they sometimes discover,” I said, smiling at the quiet impertinence of this. “They often lay bare the truth.”

“The truth is God's, it isn't man's: we had better leave it alone. Who can judge of it?— who can say?” (90)

語り手は詩人のプライバシーをさぐることによって、その作品の持つ真実を発見できると強調するが、はたしてそうであろうか。「真実は神のみぞ知るものであって人は知ることができない。それならば、そっとしておいたほうがよいのではないか」というジュリアナの言葉はPrefaceにあった「ジェーン・クレアモントに（会えたとしても）自分が会いたかったかどうかは別だ」と重なりあい、ジェイムズ自身の言葉と考えられる。一方語り手は真実を発見しようと努めることを諦めてしまったら、偉大なる詩人や哲学者を正しく評価することはできない。それ故評価するための手がかりが必要であることを主張するのである。だがそれは一般の犯罪と変わらないことをジェイムズは物語のひとつのクライマックスとして見事に描いている。年老いたジュリアナがいよいよ衰弱した時、死期を前にしてアスパーンの手紙を処分してしまうのではないかと恐れるあまり、批評家はある晩遅くジュリアナの部屋を通りがかった時、中が真っ暗でティナも居ない様子に、これぞチャンスと思い、静まり返った闇の中に入って行った。ジュリアナの書き物机を開けようと手を伸ばしたその瞬間、寝たきりの筈のジュリアナが両手をあげ、じっと彼を見つめて立っているのに気付いたのである。彼の行為はまさに泥棒のそれに他ならない。しかも盗んでまで他人のプライバシーに介入しようとする行為

は普通の泥棒以上に罪が重いのではないか。ジュリアナの怒りに震えた “Ah you publishing scoundrel!” (118) という言葉は出版に携わる者の破廉恥な行為への批判の叫びである。

この出来事の後間もなくジュリアナは息を引き取る。それを知った語り手の反応は自分の破廉恥な行動を反省するどころか、手紙を略奪する機を益々ねらっている自己中心的なものである。彼を出迎えてくれたティナの “dull face” が “dull” でなくなり、“plain” できえもなくなったと見る彼の目はティナが新たな手紙の所有者であることを認識し、彼女が魅力ある存在になったことを露骨に示している。そして早く手紙のことを切りだしたくてたまらないのだが、ジュリアナの死の直後に自分の強欲さを示さないほうがよいだろうと思い、ティナから切りだしてくれるのを期待している。一方で、沈黙を守っているティナの様子はもしかしたらもはや手紙は存在しないことを意味するかもしれないとあせりもする。そして手紙を持っていないなら彼女には用がないと思う。しかし、彼女が持っていること、しかも想像以上に数多くあったことを彼女から聞いて、小躍りして喜ぶ。だがティナは彼女と結婚するのでなければ手紙は見せられないと言う。それを聞くと彼はいくら何でもそんなことはできないと家をとびだしてしまふ。そしてゴンドラに飛び乗っての彼の述懐は彼の心情と本性を赤裸々に表している。“I couldn't, for a bundle of tattered papers,<sup>16</sup> marry a ridiculous pathetic provincial old woman.” (137) と思う。他人のプライバシーを侵すことは何とも思わない彼だが、自分のプライバシーは何よりも大切に思っていることが明らかだ。あんなに欲しかったアスパーンの手紙は紙屑に見えてくるのである。時間がたつにつれ、もともと手紙のことなど聞かなければよかったと思う。手紙がなくても、じゅうぶん資料はあったのだから…と思い、自分の現在の苦悩はとどまるどころを知らない人間のおろかさに対する罰であるとはじめて反省する。そしてその手紙を手に入れようとして法外な金を使ってしまったことに愕然とするのである。しかし、彼の反省が他人のプライバシーを侵そうとしたことに対する真摯な反省ではなかったことはその晩眠っているうちに “a passionate appreciation of Juliana's treasure” (140) が再び起

こってきて、ティナがつけた条件は障害ではないように思えてくるところに明らかである。ティナの心を無視して獲物を獲得することを考えるのだ。そして物語のクライマックスはそういう彼を迎えたティナが手紙は一枚一枚焼いてしまったことをさわやかに告げる場面である。

自分の目的のためには他人の心をふみにじることも何とも思わない自己中心的な語り手を主人公にプライバシーの問題を考えているジェームズだが、物語中の他の人物についてはどうであろうか。まずティナの場合、老いたジュリアナとの貧しい孤独な生活の中で、自分の目的のためとは言え、親切にしてくれる下宿人に心を寄せたことは理解できる。彼は下宿をしたい口実として庭いじりをしたいことを強調した経緯から、庭師を雇って庭の手入れをして花を育て、ジュリアナとティナにたくさん贈った。その花は彼女らに喜びを与え、ティナはひとりで庭に出るようになる。そしてジュリアナの依頼によるとはいえ、語り手に連れられて、ゴンドラに乗り広場を訪れもする。語り手は彼女にとって長い間隔絶していた世の中と接触させてくれる優しい人に思えたのであろう。そして結婚による幸せを夢みて叔母のプライバシーを侵すことに一時は心が傾いてしまうのだが、語り手の拒否にあい、思いかえして、ジュリアナの意志を通すことができた。しかも、自分の心を踏みにじた語り手に背を向けるのではなく、相對峙して幸せを願う彼女には人間としてなすべきことをした落ち着きがある。ジュリアナは“she lived on them [The Aspern Papers].” (132) とティナが言う通り、過去の思い出に生きている人間で、決して自分のプライバシーに触れられたくない意志表示であるかのように目の前に顔の半分をおおう布をぶら下げている。その彼女がただ一度だけその布を持ち上げ、怒りにふるえる自分を見せたのは批評家が彼女のプライバシーである手紙に手を伸ばそうとした時だ。それがもとで死期を早めることになったのであろうから、彼女はまさにプライバシーを死守したわけである。“I belong to a time when that was not the custom.” (31) と言って語り手との握手を拒むジュリアナだが、現実には物質主義の世の中に存在しているわけで、ロマンティックな幻想を持っている批評家をがっかりさせるような金銭感覚の鋭さを見せ、自分の有利な立場を意識して、法

外な家賃の前払いを要求したり、無名の画家であった自分の父親が描いたア  
スパーンの小さな肖像画を高く売りつけようとしたりする。ジュリアナの描  
写は過去と現在をつなぐ媒体は過去そのものではないことを読者に認識させ  
る。

“palpable imaginable visitable” と思える過去であればこそ、それを再現  
するための媒体を手に入れたくなるものだ。しかし、その媒体がこの物語に  
おける手紙のように他人のプライバシーにかかわる場合、道義的問題は避け  
られない。この物語の語り手は「自分のためではなく」と手紙を略奪するこ  
との公共的意味を繰り返し述べていたが、手紙の入手の可能性が自分のプ  
ライバシーにかかわることになった時、あわててその可能性を放棄して逃げだ  
した。この描写でジェイムズはこの語り手を批判するというよりも、プ  
ライバシーの根本的意味を提示しているのではないだろうか。

### III

「ザ・リバーバレイター」において若いアメリカ娘フランシーの軽率な行  
為を天真爛漫ではすまされないこととして、初期の作品とは異なりアメリカ  
娘に厳しい目を向けているジェイムズだが、「ロンドン生活」でも再びアメリ  
カ娘をとりあげ、初期の作品とは異なった扱い方をしている。New York  
EditionのPrefaceにおいてinternational situation をテーマとすることは  
いわば道端に咲いている花に手を伸ばして摘み取るようなもので、たやすか  
ったことを述懐しているすぐ後に、「ロンドン生活」は“a contribution to  
my comprehensive picture of bewildered Americanism”<sup>17</sup>という注目  
すべき言葉を使っている。初期の作品において純粹無垢なアメリカ人があこ  
がれの伝統あるヨーロッパに来たが、文化の違いに戸惑い、理解できないま  
まに社会に受け入れられない姿を描いてきたジェイムズだが、この作品では  
短期間にヨーロッパ社会に順応し、しかもその頹廢的な部分に驚くほど同化  
しているアメリカ娘を登場させている。彼女の姿は、年月を経て、もはやア  
メリカ人にとってヨーロッパが高い壁でさえぎられる世界ではなくなったこ  
とを感じさせるが、ジェイムズはそのヨーロッパ文化に同化したアメリカ娘

をこの作品の主人公にしているわけではなく、その妹で1年半前にアメリカから来て一緒に住むようになった若いアメリカ娘の意識に焦点をあて、この物語を書いている。この妹娘の頑固なアメリカニズムをジェームズがどのように見ているかが興味あるところである。

1887年2月20日の *Notebook* にはこの物語の構想についてかなり詳細な記述があるが、ジェームズが強調している一つのポイントは境遇も性格も姉妹を対照的にすることである。二人とも欲しいものは何でも与えられる富裕な家庭に育ったが、姉のセリーナはかなりの持参金を持ってイギリス人ライオネル・ベリングトンと結婚し、ロンドンの上流社会の生活にひたっているのに対し、妹のローラは父親の破産、両親の死というあいつぐ不幸にあい、一文無しの状態で、姉を頼ってアメリカからやって来たのである。性格的にもセリーナは軽っぽくて調子がよく、社交的で、新しい環境になじみやすいのに対し、ローラはきまじめで、正直で、傷つきやすく、異なった環境にうまく順応できない。ローラは姉の結婚後数年して再会したわけだが、姉がすっかり変わってしまったことに驚く。とても純粋だったはずの姉がいつの間にか不真面目でうわついた人間になっていることにどう対処してよいのか、はじめは当惑し、それから嫌悪し、彼女が必要と考える処し方をしていくわけである。ローラの戸惑いを通してジェームズはロンドンの生活が数年の間に一人のアメリカ娘をヨーロッパ文化の頹廢的な部分を身につけた女性に変身させたことを鮮やかに描いている。セリーナは天性の美貌にみがきをかけ、パリのファッションに身をつつんで、身のこなしもチャーミングで、ロンドンの社交界でも一際目立つ存在である。美しく洗練された姉の姿にローラは憧憬の目を向けるのだが、その生活ぶりには感心できない。セリーナの生活は落ち着きがなく、二人の息子たちは家庭教師に預けて人を訪問したり、食事に出かけたり、観劇に行ったりして家を空けることが多い。しかも夫のライオネルとはしっくりいっていない様子で別行動が多く、顔をあわせると彼の不品行を口汚く罵ったりもする。セリーナは如才なく演出したような行動をし、不愉快なことはたやすく忘れることができる様子で、いかにもヨーロッパ社交界の人になりきっている。そればかりでなくローラを何よりも愕然と

させたのはセリーナが浮気をしているらしいことである。真相がわからないうちからローラは姉の行為を深刻に憂慮し、狼狽する。ジェイムズはセリーナの行為はローラが心配すべき問題ではないことを、世事をわきまえた老婦人ダベナントの言葉を通して示している。老婦人は“it isn't the business of little girls to serve as parachutes to fly-away wives!” (279) と言い、そればかりでなく、いくら姉のことであっても他人の行動をとやかく言うのは出過ぎたことであるとたしなめている。ローラはセリーナの浮気を確認するにつれ、何とか姉に反省をさせ、悪の状態から救い出したいと願うが、ジェイムズはたとえ姉妹であっても、プライバシーはプライバシーであり干渉することはできないことを、セリーナを更生させようとするローラの試みが成功しないことを通して描いている。口ではローラに謝り、ローラの言うなりに行動するように見せ掛けながら、結局オペラ観劇という公衆の面前でまんまと妹を欺き、駆け落ちへのステップを踏みだしたセリーナはローラがいくら必死になっても、他人のプライバシーには干渉し得ないことを如実に示している。ジェイムズは再びダベナント夫人の言葉を通して、セリーナの行為は好意的に見ることはできないが、しかし世間にはよくあることで、ローラはきびしくとらえすぎているという見方を示している。

ローラは姉のことがスキャンダルになるのは必至と感じ、自分も被害を被ることを恐れて焦るあまり、自分に好意をもっていると思う青年ウェンドウヴァーに自分の方から結婚を申し出る。しかし相手にその気がないことを悟って、やり場のない自己嫌悪に陥る。この場面の後に続く12章で、ローラはダベナント夫人にいきさつを話し、その後で夫人は青年を自宅に呼んでローラの行為を説明する。この章はそれまでのローラの意識に焦点をあて進めてきた物語の流れを壊すことになってしまうが、事情の説明がなければ、確かに青年にはオペラ劇場でのローラの奇妙な言動はただ突飛に映るだけで終わってしまい、物語そのものが意味をなさなくなってしまう。すべてをわきまえた感じのダベナント夫人から説明されてこそ青年には事情が納得いくし、また読者も第三者の目を通しての説明にローラのせっぱつまった心境を客観的に確認することができる。従って、統一性を欠くように見えるこの章は物語



の構成上計算されたものなのである。この章により、次章での、ローラを見放すことができないウェンドウヴァーの真摯な姿が説得力あるものとなる。そしてその彼に耳を傾けようともせず突き放すローラのかたくなな態度は、彼女が自分の視点でしか物事を見られない偏狭な人間であることを印象づける。ローラは結局アメリカに帰って行く。この結末についてジェイムズは“it is the only possible one”<sup>18</sup>と断言しているが、この言葉にローラについてのジェイムズの見方が端的に示されている。ヨーロッパ文化の頹廢的側面に同化してしまったセリーナの行動の善し悪しは別として、それはあくまでセリーナのプライバシーであり、たとえ姉妹であっても第三者にはどうすることもできない。ピューリタンの潔癖症のアメリカ娘がひとりよがりの道德観でよくないと思うことに一々神経質に反応するのではとても異質の文化の中では生きていけない。

セリーナの子供たちについても、両親に放りっぱなしにされてかわいそうだとローラは思うが、当の二人は何の屈託もなく、実に伸び伸びと育てている。ローラが眉をひそめる環境の中でも、彼らはそれを別に不幸とせずに生きていく術を身につけている。この子供たちがアメリカ人を母親としていることを考えると、文化はまぎれもなく融合していることが感じられる。このようにジェイムズはこの物語では姉妹の描写を通して、アメリカ人のヨーロッパ文化への接し方が多様化してきたことを示している。そうした中でヨーロッパの文化は個人の自由を尊重し、お互いの行動に関してより寛大であることにジェイムズは目を向け、自分の道德感にそぐわないことに我慢ならないアメリカ娘の態度を偏狭と見ているのである。

#### IV

イタリア滞在中に書かれたこれらの作品を分析してみると、ヨーロッパとアメリカの文化の違いを強調して、アメリカ人の純粹さ、伸びやかさに同情とあたたかい目を向けていた初期の作品に比し、ジェイムズのアメリカ人に対する見方がきびしくなっていることがわかる。それは根底にプライバシーとパブリシティに関するこだわりがあり、その感覚の希薄をジェイムズは嫌

っていたのだ。一方で、パブリシティの波がまだ押し寄せていないイタリアは自由で心地よかったであろうが、時代認識の鋭いジェイムズはそこが自分の居るべき場所でないことも認識したものと思われる。

古い時代がまだ残っているイタリアに滞在していると、近代化の進んでいるアメリカとイギリスはその差異よりもむしろ共通点が強調され、一括りにできることを感じさせられたのではないだろうか。ロンドンに戻ってから兄ウィリアムズに宛てた手紙に注目すべき下記のような記述がある。

I can't look at the English and American worlds, or feel about them, any more, save as a big Anglo-Saxon total, destined to such an amount of melting together that an insistence on their differences becomes more and more idle and pedantic and that that melting together will come the faster the more one takes it for granted and treats the life of the two countries as continuous or more or less convertible, or at any rate as simply different chapters of the same general subject.<sup>19</sup>

長い間international situation をテーマに小説を書いてきたジェイムズがイギリスとアメリカの文化の差を強調するよりもむしろ、“a big Anglo-Saxon total” として見るという見方に大きく変化した直接の要因は何と言っても6カ月のイタリア滞在であろうが、実際にアメリカの国としての発展が進み、一方的にヨーロッパの文化に憧憬の目を向けるだけでなく、アメリカの文化がヨーロッパに与える影響も無視できなくなってきたことをジェイムズ自身認識していたことがうかがえる。双方の文化の交流が進むとともに、文化の受け止め方にも個人差がでてきて、アメリカ人、イギリス人という画一化が意味をもたなくなったことを感じたのであろう。ジェイムズは自分のアイデンティティについても、かつてのはっきりとアメリカ人として書いていた立場から“I am, at a given moment, an American writing about England or an Englishman writing about America”<sup>20</sup>と柔軟な立場に修正しているのである。

## 注

- (1) Henry James, *Letters* III ed. Leon Edel (Cambridge : Harvard UP, 1980) 182.
- (2) Henry James, *The Reverberator* (New York Edition vol.XIII) 以下、本論中のこのテキストからの引用はそのページを括弧内の数字で示す。
- (3) Henry James, *The Aspern Papers* (New York Edition vol.XII) 以下、本論中のこのテキストからの引用はそのページを括弧内の数字で示す。
- (4) Henry James, *A London Life* (New York Edition vol.X) 以下、本論中のこのテキストからの引用はそのページを括弧内の数字で示す。
- (5) Henry James, *The Complete Notebooks of Henry James*, ed. Leon Edel and Lyall H. Powers (New York : Oxford UP, 1987).
- (6) Leon Edel, *Henry James: The Middle Years* (New York : Avon Books, 1978) 229.
- (7) *The Notebooks* 40.
- (8) *Letters* III 155.
- (9) *The Notebooks* 40.
- (10) *The Notebooks* 42. 強調添加.
- (11) Henry James, “William Ellery Channing” in *Literary Criticism* (New York : Literary Classics of the United States, 1984) 212.
- (12) *The Notebooks* 14.
- (13) Henry James, Preface to *The Aspern Papers* (New York Edition vol.XII) x.
- (14) 語り手の名前も職業も明示されていない。イギリス人クムナーとともに、アスパーン研究の第一人者と自負しているが、彼の関心はアスパーンの詩に伝記的要素を読みとることにあるらしいことは確かである。このことからスーザン・カペラーは “the poem serves him as a document

of the poet's life” であるとして、彼は文芸批評家というよりも、むしろ歴史家、或いは伝記作家であるとしている。Susan Kappeler, “Epic Laws and *The Aspern Paper* : A First Analysis”, *Henry James: Critical Assessment* vol.IV ed. Graham Clarke (East Sussex, Helm Information, 1991) 109.

- (15) 語り手の友人であり、同じくアスパーンの研究者であるクムナーはこれより先に手紙を見せてくれるように文書でジュリアンに再三頼んだが、拒絶されている。
- (16) 強調添加。
- (17) Henry James, Preface to *A London Life* (New York Edition vol. X) xviii.
- (18) *The Notebooks* 40.
- (19) *Letters* III 244.
- (20) *Letters* III 244.